

組織目標評価報告書（平成25年度）

部局名：キャリア開発センター

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
<p>①教育領域</p> <p>①-1 目標</p> <p>1) キャリア開発センター教員を中心に、企業等との連携を密に実践的キャリア教育実施体制を継続する。</p> <p>2) 新規キャリア教育科目を開発するとともに、既存の内容を継続的に検討し、教育内容を一層充実させる。</p> <p>3) キャリア教育の履修が、3年次の就職ガイダンスやアドバイジングへのスムーズな移行に繋がるよう継続的に授業を開講する。また、実践的キャリア教育の取り組みが就職活動におけるアピール材料として活用されるよう体験型授業を継続的に開講する。</p> <p>4) 正課外活動施設が機能的に活用されるよう促進するとともに、学生の自主的活動が活性化するように支援を行う。</p> <p>①-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <p>1) 授業シラバス 2) ポートフォリオ、開発されたテキスト及び教材、アンケート結果 3) 就職ガイダンス実施状況・参加者 4) トレーニング講習会、幹事総会実施状況、リーダー研修会、就活合宿参加者</p>	<p>自己評価</p> <p>1) 正課のキャリア教育においては、山陽新聞社と連携して実践的メディア授業「キャリア形成総合演習Ⅰ」を継続開講した。また、キャリア形成実践講座Ⅱ(新設)やキャリア形成総合演習Ⅱにおいても地元企業との連携によって充実した内容をつくり出すことができた。</p> <p>さらに、正課外のキャリア教育においては、本センターが主催する学生企画チーム「岡プロ!」による山方永寿堂との岡大きびたんご販促活動をはじめ多数の民間企業との連携によって充実した活動が進められている。</p> <p>2) キャリア教育に関する基礎的内容及び演習的方式に加えて、実践的内容という領域「キャリア形成実践講座」を新設した。また、既存のキャリア形成基礎講座Ⅰは、作成したテキストによって、非常勤講師やTAとの意思疎通を図るなどスムーズな進行を実現できた。さらに、ポートフォリオ及びアンケートも継続的に取り組み、教育効果の可視化に臨んできた。</p> <p>3) 初年次のキャリア教育の中でも随時キャリアアドバイジングやガイダンスの紹介を行うとともに、学部別ガイダンスにも積極的に取り組んできた。その際、新たに作成したリーフレットも活用できた。また、就職活動にも役立つプログラムとして、正課ではキャリア形成総合演習、正課外では前項のような取り組みを提供してきた。</p> <p>4) 本センターでは、校友会クラブとセンター主催の学生企画チームを中心に支援してきた。校友会については、トレーニング講習会やティーピング講習会を通して身体的サポートを行った。さらに、年間10回の幹事総会やリーダー研修会、就活合宿を通して校友会に所属する意識づくりも行った。校友会総務委員会の組織改革にも携わり、委員たちが主体的に取り組める環境整備を行った。学生企画チームについては、学生の要望別にコーディネートを進めてきた。</p>
<p>②研究領域</p> <p>②-1 目標</p> <p>1) 授業アンケートや企業アンケート等の集計結果は、年報、紀要、学会発表にて公表する。その他キャリア支援に関する実践的な検証及び教育方法の開発をまとめて、学会誌、紀要等で公表する。</p> <p>2) マンパワーに限界があるため、センター本来の業務を優先して行う。</p> <p>②-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <p>キャリア開発センター年報または大学教育研究紀要等</p>	<p>自己評価</p> <p>1) 授業アンケートについては、ポートフォリオと連動させながら、授業科目ごとのデータを蓄積している。中でも、キャリア形成基礎講座Ⅰについては、データに基づき教育効果に関する詳細な分析に取り組んだ。この分析については、当該年度のセンター年報に掲載した。特に、カリキュラムの中に自校教育などを織り込むことで、学生たちは本学への帰属意識を高めることができた。意欲向上へつながるとわかった。この分析から、初年次キャリア教育の果たす役割をまた一つ明らかにできた。また、今回の分析を通して、定量分析だけでなく、学生の自由記述やインタビューなどの定性分析も同時に必要であることが確認できたので、今後の分析に役立てていきたい。そして、今回のように各科目個別の詳細な分析を行うとともに、各科目間との連関を明らかにしたり、開講年度間との比較を行ったりすることで、重層的かつ多角的な分析を進めていきたい。</p> <p>企業アンケートについては、前年度の調査結果を詳細に分析し、大学教育研究紀要第9号に掲載することができた。また、調査結果にある大きな特徴として、校友会活動を高く評価する企業が多いことが挙げられる。そこで、正課外活動支援と連動させて、この調査結果を学生たちに広く知らしめることもできた。</p> <p>さらに、上記研究及び調査に加えて、当該年度に到るまでの正課外活動支援の成果を分析するべく、校友会に所属する学生全員を対象にアンケート調査を行うとともに、校友会総務委員会のインタビューの調査も行った。その結果、校友会は総務委員会が中核として機能すればするほど、組織全体として活性化することが見えてきた。なお、この結果も前掲の紀要に掲載することができた。</p> <p>2) センター本来の業務を優先するためにも、他大学(兵庫医療大学等)や企業(サウティリサーチ株式会社等)と提携することで共同研究を積極的に行うようしている。</p>
<p>③社会貢献(診療を含む)領域</p> <p>③-1 目標</p> <p>1) 卒業生フォローアップセミナーを継続開催し、卒業生ネットワーク構築の支援を行う。</p> <p>2) 正課外活動参加学生の地域貢献活動の継続支援を行う。</p> <p>③-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <p>1) 卒業生フォローアップセミナー実施状況・参加者リスト 2) 校友会用水路清掃実施状況、校友会自転車無灯火運動実施状況、校友会ミュージックフェスティバル、岡プロ!</p>	<p>自己評価</p> <p>1) 当該年度も継続して卒業生フォローアップセミナーを東京にて2回実施することができた。参加者は1回目11名、2回目7名の参加であった。新規での参加者もあり、少しずつではあるが新しいネットワークも広がりがつつある。また、当該年度より卒業生ネットワーク構築支援として新たに岡大懇話会が発足し、3回開催したが、その開催支援を行った。</p> <p>2) 当該年度も継続して用水路清掃や自転車無灯火ゼロ運動を行うことができた。用水路清掃については、年間計13回、15体育系クラブが参加した。自転車無灯火ゼロ運動については、11月～1月の3か月間、計16文化系クラブが参加した。上記2つの地域貢献活動については、実行委員会形式を取り入れるなど、学生間の自主性が高まってきたことがわかる。また、校友会総務委員会が提示した評価基準も参加率向上に影響していることが窺える。</p> <p>さらに、平成25年10月5日(土)に開催されたミュージックフェスティバル(校友会音楽系クラブ主催)も、無事に2回目を終えることができた。こちらも、前年度に比べて実行委員会が機能していた。このように、校友会クラブが、単体クラブ内だけの取組ではなく、クラブを越えて横断的に繋がれるような活動を支援することで、学生たちの自主性をますます高めるとともに視野を広げられた。</p> <p>本センター学生企画チーム岡プロ!についても継続的な支援を行う中で、新規プロジェクトチームも2チーム誕生し、現在3つのチームで計50名の学生が参加している。特に当該年度は、これらの複数チームが連動できるようにコーディネートと専門とするチームを特設し、外部及び内部に向けた調整に重点を置いた結果、定例代表者会議などが実現し始めた。</p>
<p>④センター業務</p> <p>④-1 目標</p> <p>1) 学生相互の就職支援活動を継続的に支援する。</p> <p>2) 学部別就職ガイダンス及び全体の就職ガイダンスによる継続支援</p> <p>3) 若手研究者キャリア支援センターとの継続的な連携</p> <p>4) 東京サテライトオフィスでの学生支援及び卒業生・企業・官公庁への対応</p> <p>④-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <p>1) 就活オレ! 活動状況 2) 学部別及び全体の就職ガイダンス実施状況 3) キャリア開発センター年報 4) 東京サテライトオフィス利用状況</p>	<p>自己評価</p> <p>1) 本センターが主催する就活生相互支援チーム「就活オレ! (3・4年生)」において、当該年度も継続的な取り組みが行えるように支援した。その結果、平成25年10月12日(土)及び同年12月14日(土)には、それぞれ学生主体で企画・運営する就活セミナーを開催し、いずれも200名以上の就活生に参加してもらうことができた。併せて、毎月就活自主セミナーの企画・運営が3回生中心で行われた。また、4年生については就活サポーターの役割を担ってくれた。さらに、当該年度は1・2回生を中心にしている学生企画チーム岡プロ! から就活オレ! に継続的に参加する学生が出てきたことで、両チーム間の新しい連携の可能性も見出すことができた。</p> <p>2) 当該年度も継続して11回の就職ガイダンスと10回の公務員関連支援行事を実施するとともに、より具体的な就職活動サポートとして、面接指導や先輩からのアドバイス会、マナー講座等のセミナーや企業研究会を16回開催し、きめ細かな支援体制の充実を図った。また、学部別ガイダンスを14回開催し、各学部ごとの特徴に対応した就職活動やキャリア構築の方向性を示した。特に文系学部においては3学部の学部長、就職担当と学生把握向上のための会議を行い、進路届のフォーマットや情報収集方法の改善を図り、内定把握率が大きく向上した(12月時点での調査では内定把握率が昨年より112人増)。</p> <p>3) 若手研究者支援センターに対しては、合同企業説明会に参加する企業100社に対して博士人材に対するニーズアンケートを行い情報収集等の協力を行った。</p> <p>4) 東京サテライトオフィスへの学生利用者数は、昨年と比較して増加し(2月末時点 昨年度:206名、当該年度:286名)、同窓生・学内関係者等を含めた全体では、前年比36%増(2月末時点 昨年度:647名、当該年度:879名)で利用者数も推移している。学生の就職企業訪問、官庁訪問(人事院他)も行き、ルートの開拓に努めた。</p>
<p>【総括記述欄】</p> <p>これまで本センターの教育領域では、正課のキャリア教育の体系化を中心に取り組んできた。その結果、基礎・実践・演習の3領域9授業科目を構成し、確立することに成功した。今後は、体系化できたキャリア教育授業科目を教養教育改革の中にもどのように位置づけていけるかを検討することが求められる。と同時に、教育効果の分析に力点を置いて、客観的・数値的な効果分析が困難とされるキャリア教育効果を明確にしていきたい。特に、正課のキャリア教育においては、全授業科目の教育効果を分析する中で、授業科目間及び複数年度の教育効果に着手する必要がある。また、正課外のキャリア教育に関しても、様々な学生活動を支援してきた実績を踏まえて、これまでに以上に教育効果分析を進めていきたい。</p> <p>キャリア開発センター業務においては、就職支援行事と学生に対する個別アドバイジングを中心に、外部機関や卒業生、学生の力も大いに活用した支援体制の確立がなされ、今年度のキャリアセンターの年間利用者延べ人数、支援行事参加者数ともに8000人を超えた。しかし、次年度から就職活動の時期が変わり4年生からの就職活動となるため、これまでのような上級生によるサポートが実現しないことや、企業の採用スケジュールに合わせた支援ガイダンス時期等の予想が大変難しくなる。これまで以上に各学部との協力体制を強化し、タイムリーな情報提供と臨機応変な支援行事の開催を実現させなければならない。また、今年度企画した広島大学との共催による中四国国立大学合同企業説明会の実施に向け、他大学、就職情報企業との連携強化を促進させる必要がある。</p>	